

平成 2 2 年 6 月 1 1 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18530679
 研究課題名(和文)学校ソーシャルワークの現職教員研修のプログラム開発に関する実証的研究
 研究課題名(英文)A Study of Teacher Training for School Social Work
 研究代表者 鈴木 庸裕(SUZUKI NOBUHIRO)
 福島大学・人間発達文化学類・教授
 研究者番号：70226538

研究成果の概要(和文)：

本研究は、全国の自治体で実施された「スクールソーシャルワーク活用事業」の進展について、各都道府県で実施されるスクールソーシャルワーカー研修の実態調査をおこない、特に教員の実務者養成のあり方を検証した。

主な調査地域は、福島県を含む4自治体の地域で、実地踏査や資料収集をおこない、研修プログラムの実際、教材活用、実習技法などの専門的な指導論のスタンダードを検討した。

また、各地の研修への講師として招聴を受ける機会を活用し、研修受講者への聞き取りやアンケート調査を通じて、実践的な研修プログラムの作成をおこなってきた。これらを元に、福島大学大学院でのスクールソーシャルワーク関連科目の実施や福島大学教育実践研修講座での「スクールソーシャルワーカー養成講座」で検証的に活用し、その内容を吟味した。それらの成果は、別紙の論文や著書に示した。

研究成果の概要(英文)：

School social worker work with children,families,schools and communities to help students make the most of his/her educational experience.A student learning can be affected by a number of social,economic and emotional issues.School social worker must continue to be highly visible,credible and accountable.In Japan,an effort of the establishment and preparation advances by a district educational adomistration now.We have to query an ability and knowledge peculiar to it as a school social worker in school setting.Therefore,in this paper,I stand on guidance management hearing investigation from the practices equal to supervision in a social work section of Toronto district school board and want to think about an examination problem in training guidance in a talented person training(graduate school)stage and professional standerds and training.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,500,000	0	1,500,000
19年度	500,000	150,000	650,000
20年度	500,000	150,000	650,000
21年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	480,000	3,580,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教科教育学（生活指導）

キーワード：学校ソーシャルワーク、コーディネート、チームワーク、家庭・学校・地域の連携

1．研究開始当初の背景

今日、学校と医療、福祉、保健、司法等の諸関係機関と連携協働する教師自身の力量形成、及び、不登校や発達障害、児童虐待・ネグレクトなどの問題解決に関わるチームワークづくりやコーディネーターとしての実践力形成に関するプログラム開発が求められている。また、その研修のための諸ツール（アセスメントシートや教材等）の開発が重要になる。

教育と福祉それぞれの行政的な結びつき以上に、それぞれの専門職相互の関係意識について著しく乖離がある。本研究の開始にあたり、教師の指導文化と社会福祉の援助文化とのズレを補正しつつ、共通する技術概念の調整を行った上で、研究に取りかかった。

2．研究の目的

本研究の目的は、学校・家庭・地域をつなぐ学校ソーシャルワークの機能を活かした実践力を、現職教員の研修段階において形成する研修プログラムの開発とその実効性の検証にある。

主に、学校において福祉専門職を適切に活用できる教師自身の力量や学校の活用体制の課題がある。スクールカウンセラーも同様に、こうした「外部人材」をめぐるチームワーク論や相互援助技術は個々の学校や教師にその研鑽が委ねられることが多かった。今後、こうしたテーマに関して、生徒指導や教育相談、特別支援教育コーディネーターの担当教師や養護教諭、教育委員会・指導主事等への研修状況とその課題、そして具体的な研修のプログラムや演習の

内容モデルの開発が緊急課題の段階になってきている。教師が医療、福祉、保健、司法などのヒューマンサービスの専門職との多職種チームを形成する際に、異職種と肩を並べ問題解決に取り組み、それぞれの社会的職務や専門性を活性化し、つないでいくコーディネートの担い手となりゆく教師への支援環境は重要となる。

このことは、児童生徒に携わる様々な領域や分野の専門性を地域横断的につなぎ、それを活性化する専門性の能力開発という意味で、教師のみならず、連携、チームワーク、ネットワークの構成員である他の領域スタッフにとってもその共有化をはかるものとなる。

3．研究の方法

これまでに全国の自治体で実施された「スクールソーシャルワーク活用事業」の現状調査及び県内の動向調査の報告書を作成する。

また、スクールソーシャルワーカー研修の実態調査をおこないつつ、実務者養成のあり方のマニュアル、ガイドブックを作成し、福島県内の他、3県で研修会を実施し、詳細の修正検討をおこなう。研修プログラムの実際、教材活用、実習技法などの専門的な指導論のスタンダードを検討する。

また、各地の研修への講師として招聴を受ける機会を活用し、研修受講者への聞き取りやアンケート調査を通じて、実践的な研修プログラムの作成をおこなう。

これらの検証にあたり、福島大学大学院でのスクールソーシャルワーク関連科目の実施記臥福島大学教育実践研修講座での「スクー

ルソーシャルワーカー養成講座」を活用する。

4. 研究成果

(1)教師個人、あるいは校内の関係委員会の一員として、医療、福祉、保健、司法等の諸機関との連携に関わる実践的な力量形成について、今日、都道府県教育委員会（教育事務所や教育センター等）による現職教員研修ではどのような方法、内容、プログラム、体制で研修が実施されているのかについて、その動向と課題を明らかにした。

(2)学校におけるいじめや不登校問題、ADHDなどの発達障害、学業不振、非行、被虐待児、特別なニーズをもつ児童生徒への対応について、教師（学校）が地域の関係機関職員や保健福祉医療行政の担当者（保健師、家庭児童相談員等）、地域住民（主に民生委員、主任児童委員、保護司、健全育成関係等）とのチームワークやネットワークにおいて支障となっている事柄（例えば、他機関の専門性や法的基盤に関する知識、守秘義務の保持、記録の取り方や管理方法、信頼関係の形成方法など）を明らかにした。

(3)個々の児童生徒や家族（養育者）への個別支援計画の作成やアセスメント、校内支援チーム体制づくりのためのワークショップ方法や資質向上のためのプログラムやトレーニングプログラム（その評価方法を含む）の開発を実証的におこなう。小、中、高、特別支援学校ごとに、関係機関別に一定の般化しうるランドデザインの作成やアプローチ技法のマニュアル、アセスメントツール、研修用教材の開発と実践的検証である。例えば、「多問題家庭への訪問技術」「関係機関との調整機能の活性化」、「学校の地域ネットワークの形成と社会資源の活用」、「支援チームの運営方法とコーディネートの実際」などについて、現職研

修における検証実践の実施を通じて評価尺度の開発をおこなった。

なお、報告書として、「スクールソーシャルワークの視点を活かした学校支援ガイドブック」を作成。また、4年間の研究成果をもとに、下記の論文発表、著書刊行等をおこなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計11件)

1 鈴木庸裕「スクールソーシャルワーカーの業務と学校支援(2)」『福島大学総合教育研究センター紀要』第7号、p.15-p.22(2009)

2 鈴木庸裕「スクールソーシャルワーカーの業務と学校支援(1)」『福島大学総合教育研究センター紀要』第6号、p.17-p.24(2009)

3 鈴木庸裕「学校ソーシャルワーク専門職の養成をめぐる実習カリキュラムの一考察」『学校ソーシャルワーク研究』（日本学校ソーシャルワーク学会編）、第3号、p.25-p.39(2008)、査読有

4 鈴木庸裕「教師のための学校ソーシャルワーク実践論」『福島大学総合教育研究センター紀要』第4号、p.57-p.64(2008)

5 鈴木庸裕「子どもの人権擁護を担う地域のコーディネーター」『生活指導研究』（日本生活指導学会編）、第24号、エイデル出版、p.64-p.76(2008)、査読有

6 鈴木庸裕「スクールソーシャルワーカーの人材養成」『学校ソーシャルワーク研究』（日本学校ソーシャルワーク学会編）、第2号、p.5-p.13(2008)、査読有

7 鈴木庸裕「学校ソーシャルワークの現在・過去・未来」『学校ソーシャルワーク研究』日本学校ソーシャルワーク学会、創刊号、p.5-p.13(2007)、査読有

8 鈴木庸裕「児童虐待をめぐるソーシャル

ワーカーの資質向上」『福島大学総合教育研究センター紀要』第2号、p.57-p.64(2007)

9 鈴木庸裕「学校ソーシャルワークと教育機会の保障」『福島大学人間発達文化学類論集』第3号、p.27-p.42(2006)

10 鈴木庸裕「専門的実践領域としての学校ソーシャルワーク」『福島大学総合教育研究センター紀要』創刊号、p.75-p.82(2006)

11 鈴木庸裕「学校ソーシャルワークから見た特別なニーズ教育」『SNEジャーナル』(日本特別ニーズ教育学会編)、p.28-p.48、文理閣(2006)、査読有

〔図書〕(計5件)

1 「学校教育が抱える今日的課題」『ハンドブック・学校ソーシャルワーク演習』ミネルヴァ書房門田光司・鈴木庸裕編、p.1-p.17

2 「スクールソーシャルワークとその職務が持つ目的と課題」『スクールソーシャルワーク実習・演習テキスト』北大路書房、米川和雄編(15人中6番目)、p.95-p.115

3 「教師の仕事とスクールソーシャルワーカーの接点」(日本学校ソーシャルワーク学会編・鈴木庸裕他編集、共同執筆2名目、)『スクールソーシャルワーカー養成テキスト』中央法規出版社、p.42-p.59(2008)

4 「カナダにおける子どもの教育機会の保障とスクールソーシャルワーク」『スクールソーシャルワークの可能性』(山野則子他編・共著12名で10人目)、ミネルヴァ書房、p.218-p.241(2007)

5 「学校・教師・学習とスクールソーシャルワーク」『スクールソーシャルワーク論』(山下英三郎他編・12名と共著8番目)、学苑社、p.129-p.142(2007)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.jsssw.com>

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 庸裕 (SUZUKI NOBUHIRO)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：70226538